

不義の子の罪：『苔の衣』冬巻「いと罪深きことにてあんなるものを」考

宮崎，裕子
自由ヶ丘高等学校：常勤講師

<https://doi.org/10.15017/15083>

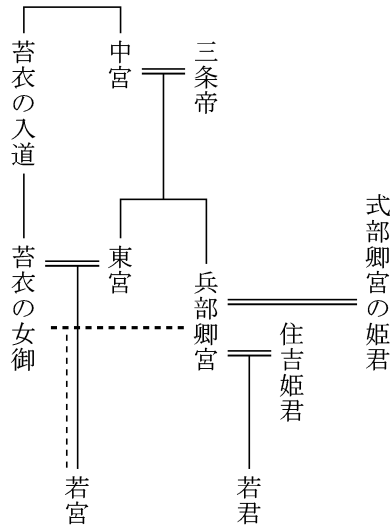
出版情報：文献探究. 46, pp.69-73, 2008-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

不義の子の罪―『苔の衣』冬巻「いと罪深きことにてあんなるものを」考―

宮崎裕子

文永年間頃の成立と推定される『苔の衣』は三世代に亘る物語である。

【系図】



その第三世代に属する苔衣の女御は幼くして母親と死別し、父方の伯母・中宮の許で、兵部卿宮と共に育てられた。長じて

苔衣の女御は東宮へ入内するのだが、幼少の頃から女御を恋慕し続けていた兵部卿宮は、その思いを断ち切ることができず、遂に里下がり中の彼女のもとへ忍び入る。その結果女御は懐妊したが、秘密裏に出産して子供を兵部卿宮に渡すようなことはせず、誕生した男児を東宮の若宮と偽ったため、兵部卿宮は我が子に叔父として接する自分の宿世を「心憂く契り口惜し（冬巻232頁／注1）」いものと痛感する。

若宮を「よその人に見な（冬巻232頁）」す兵部卿宮は、せめて、密かな通い所に行っている住吉姫君が身籠もった子供を手元に置き「私の物にもて扱（冬巻232頁）」おうと、その誕生を心待ちにするが、兵部卿宮の正妻・式部卿宮の姫君の、母方の叔母の養女として式部卿宮邸に住まっていた住吉姫君は、兵部卿宮との仲が発覚したことにより式部卿宮家に居辛くなり、身重のまま行方をくらませてしまった。縁の尼君が隠棲する住吉に隠れ住んで若君を出産した住吉姫君は、その翌年死去し、兵部卿宮の夢枕に立って、

「ものはかなげにて生ひ立ち給ふ人の行方、必ず尋ね取り給へ」
(冬巻256頁)

と子供の誕生を告げるが、住吉で若君を守り育てる尼君には兵部卿宮への伝手を得難く、宮は若君との対面を果たせないまま日を重ねる。

こうして、苔衣の女御に拒絶され、住吉姫君を失い、正妻である式部卿宮の姫君とも疎遠になった兵部卿宮は、憂悶のうちに日々を送り、若宮が三歳になった年に病臥する。病の床で来し方行く末に思いを馳せた兵部卿宮は、住吉姫君から夢告でその存在を知らされた若君、そして、兄・東宮の子とされている若宮、二人の我が子との儂い縁を嘆く。

「…行方なく尋ね失ひたる忍ぶ草(住吉姫君腹ノ若君)いかなるさまにて生ひ出づらん。親子の契りは結び置きながら、この世にてあひ見ることだに無きさまにてこそはさすらふらめ。辱けなく心憂く」など思しやる。「必ず行方尋ねよ」とありし夢の(住吉姫君ノ)面影も御心に離るる世なし。「さすがに浅からぬ契りにはありながら、春宮の若宮などをばよその人に見なしきこえて、折節につけては恋しく思ひきこゆれど見奉ることなく、せめては今しばしに言長らへて、そら恐ろしきことなれどあの御心一つにだに言ひ知らせ奉らん。いと罪深きことにてあんなるものを」など思すぞ春宮の御ため後ろめたきや。御心地の隙には忍ぶ草のことを母宮(中宮)にも返す返す申し置き給ふ。

『中世王朝物語全集』では、傍線部の「あの」を苔衣の女御を指すものとして当該箇所を現代語訳し、「罪深きこと」は兵部卿宮が女御に自身の心情を訴えかけることだと解釈している。

あのお一方のお心にだけでも私の気持ちをお知らせしたいものだ、実に罪の深いことだろうけれど (冬巻261頁)

だが、東宮の子にされてしまった若宮を偲ぶ一文中の「あの」を、若宮ではなく、苔衣の女御を指すものと解するのは、些か唐突の感が拭えない。仮に「あの御心」が「苔衣の女御の御心」を意味するのであれば、「ありし夢の面影」が、住吉姫君腹の若君ではなく、「必ず子供を探し出して欲しい」と告げた住吉姫君の「面影」を指すと明示する前文と同様に、「あの」などという指示語ではなく、明らかに苔衣の女御その人であると判る表現を用いたはずである。やはり、「あの」は若宮を指すと解するのが妥当であろう。

そして、兵部卿宮が、せめてもう少しだけ生き長らえて、つまり、表向きは自分の甥となっている若宮の成長を待って、彼にだけでも密かに知らせたいと願う事柄は、自分が実の父親であるという真実に違いない。

ゆえに、「あの御心一つにだに言ひ知らせ奉らん。」の解釈は、

若宮にだけでも真実をお知らせ申し上げたい。
となる。

やや難解なのは、続く「いと罪深きことにてあんなるものを」である。ここで言う「罪深きこと」とは、一体何を指しているのだろうか。

*

『苔の衣』には前掲箇所以外にも、父子の間柄に関する「罪」への意識が表れている場面がある。

(住吉姫君ハ)まことに生くべくもなくのみなり給へば、
破り残しつつ置き給へりし宮の御文のあるを、(若君ガ)
むげにその御あたり(＝兵部卿宮)のことの知り給はざら
んも罪深ければ、はかなき産衣やうのものにしたため具し
つつ置き給ふ…
(冬巻254頁)

自らの死期を悟った住吉姫君は、父・兵部卿宮にその誕生すら知られていない若君のために、かつて宮から贈られた手紙を遺しておく。若君が父宮のことを全く知らないのは「罪深」いと考えたからであり、子供が自分の父親を知らずにいるのは「罪深」ことなのだとの認識がうかがえる。

東宮の子だと偽られた若宮も、住吉にいる若君と同じ「罪」

を負っているはずで、兵部卿宮が思う「罪深きこと」とは、若宮が兵部卿宮を実の父親と知らずに過ごすことを指すのだろう。

実際、実父が誰なのかを知らなければ父に孝養を尽くすことができず、それは仏教で言う四恩(父母・国王・衆生・三宝)の一つに背く罪となる。

『源氏物語』でも、冷泉帝に出生の秘密を明かした僧都は、帝が光源氏の息子であるという真実を、「(冷泉帝ガ)知ろしめさぬに罪をもくて、天眼おそろしく思給えらるゝ事(薄雲巻②233頁/注2)」なのだと言う。そして、その真実を告げられた冷泉帝は、僧都に対して、

心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、いままで忍びこめられたりけるをなむ、かへりてはうしろめたき心なりと思ひぬる。

(薄雲巻②235頁)

と、光源氏が実の父であるという事実を知らないままでいたら、来世までも罪障を負うことになっただろうと応える。冷泉帝に対しては出生の秘密をひたすら隠し通した藤壺女院も、その一方で、帝が光源氏を実の父と知らずにいれば「罪得る事(薄雲巻②239頁)」になるのではないかと案じ、嘆いていた。また、実父柏木の乳母子である弁から柏木の遺言を聞かされた薫も、

かゝるたひめむなくは、罪重き身にて過ぎぬべかりける事
…。
(橘姫卷④332頁)

と、弁と出会って真実を知らされなかつたら重い罪を負つたま
までいただろうと謝辞を述べている。

*

『苔の衣』の若宮は、兵部卿宮が死去した翌年、表向きの父
である東宮の即位に伴い、立坊した。やがては『源氏物語』の
冷泉帝と同様に帝位に即くはずの若宮が、実の父は兵部卿宮で
あると知らずにいたらどうなるのか。実父を知らないことだけ
でも「罪重き身」となるのだが、玉座にある人物の場合は、自
分一人が罪障を背負うのみならず、その治世に天変地異などの
頻発を招くこととなる。

光源氏と藤壺女院との不義の子であるという真実を秘された
冷泉帝の治世には、一時期暗雲が立ち込め、

その年、大方、世の中さはがしくて、おほやけさまにも
ののさとししげく、のどかならで、天つ空にも例に違へる
月日星の光見え、雲のたゞまひありとのみ、世の人おど
ろく事多くて、道くの勘文ども奉れるにも、あやしく世
になべてならぬ事まじりたり。内のおとゞ(光源氏)の
みなむ、御心のうちにわづらはしくおぼし知らるゝ事あり

ける。

(薄雲卷②228頁)

と、疫病の流行や凶兆を示す天変地異などが起こっていた。そ
の原因を、冷泉帝に真実を告げた僧都は、帝が実父を知らず、
四恩の一つに背く罪を犯していることを天が咎めているから
だ、と奏上する。

天の咎めを畏怖した光源氏同様、『苔の衣』の兵部卿宮も、
自分の子である若宮が、実父を知らないまま帝位に即くことに
よって、その治世を世情不安に陥らせるのではないか、と懸念
していたのだろう。その心情が表れた「いと罪深きことにてあ
んなるものを」の意味するところは、次のように解釈できよう。

実の父親が誰なのかを知らなければ父への孝養が出来ず、
それは「たいそう罪深いこと」であると言うから。

だからこそ、せめてもう少しだけでも生き長らえて、若宮の成
長を待ち、自分が実の父であるという真実を伝えたい、と兵部
卿宮は願ったのだ。

*

不義の子は、「不義の子である」という自身の出生の秘密を
明かされない限り、知らず知らずに、実の親への孝養を尽くさ
ない罪を犯してしまふ。それは不義の子の原罪とも言うべき

ものなのかもしれない。結局、兵部卿宮は若宮に真実を伝えるすべもなく死去し、生まれながらに罪を背負わされた若宮を東宮に据えた『苔の衣』の物語は、次世代に波乱の火種を内包しつつ、大団円無き終幕を迎える。

注

(1) 『苔の衣』の引用は、『中世王朝物語全集』に拠る。

(2) 『源氏物語』の引用は、『新日本古典文学大系』に拠る。

(みやざき ゆうこ・自由ヶ丘高等学校常勤講師)